

公民館でオンライン診療

勇払地区 市内初、来月スタート

苦小牧市の勇払地区で6月、集合型オンライン診療がスタートする。住民が勇払公民館に集まり、インターネット回線を使って苦小牧東病院(橋本洋一院長)の診療を遠隔で受けることができる。通院に不便を感じている高齢者らの声を受け、市社会福祉協議会が同院に働き掛けて仕組みを構築した。市内では初の試み。

市社協と市

事業主体は市社協と市。能。処方薬は希望すれば同明野新町5の同院とノルデン薬局苦小牧支店が実施主体となる。市社協の担当者が月1〜2回、同公民館にタブレット端末を持ち込み、住民の予約患者がビデオ通話で医師の診療を受ける。本格運用は7月から。

診療科目は内科のみ。同院の外来を受診し、症状が安定しているなどの理由で医師から「オンライン診療が可能」と判断された人が対象。利用は月1回で、3カ月ごとに同院の対面診療を受ける必要がある。システム利用料は1100円で、診療料と合わせて口座引き落としで支払いが可能。

勇払地区の人口は約1600人。高齢化率は昨年12月末時点で39.89%に上り、市全体の平均より約10%高い。唯一の医療機関だった日本製紙勇払診療所の閉鎖を受け、市社協は2022年度、市民ボランティアが他地区の病院まで送迎する移送サービスを開始したが、利用者が増えて移送サービスだけでは支えきれなくなっていた。

このため新たな支援方法として、端末操作に不慣れな人でも受けられる集合型オンライン診療の仕組みを構築した。



考案。22年12月からオンライン診療を導入している苦小牧東病院に協力を依頼し、1年かけて協議を重ねたという。

通信状況を確認する市社協の担当者ら

公民館で通信状況などを確認するテストを実施。市や市東地域包括支援センター

の職員、住民らが参加した。市社協の担当者が同院の濱田耕司医師とビデオ通話を行い、同院地域連携室のソーシャルワーカー、喜田隆幸さんが参加者に取り組み内容を説明した。市社協の那須智孝さんは「移送サービスを使うなどの取り組みは他地域の参考にもなる」と期待した。

いる人が、1回でもオンラインでできたら負担軽減になるのでは」と指摘。市介護福祉課の佐藤敦史課長は「少子高齢化が進む中、限られた地域資源を活用し、生活の利便性を向上させることは大きな課題。勇払での取り組みは他地域の参考にもなる」と期待した。